

# さがっさのネタ置き場

さがっさ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

作者の考えたネタを書き起こして投下していくところです。  
良かったら見ていって下さい。

# 目次

一 兠ネ夕：伝承・無限軌道く武神に至る少年く	1
一 兠ネ夕：伝承・無限軌道く少女たちの変遷く	5

## 一 発ネタ：伝承・無限軌道く武神に至る少年く

——時は、西暦20XX年の春のことだった。

ある少年が、一つのパスワードスーツ——インフィニット・ストラトス、通称IS——に触れたところから始まった。

「俺は、別に進んでこのIS学園に来たわけじゃないんだけどな」

『仕方あるまい、貴様はこの須佐能乎命を宿したことであいえずを動かすことが出来る唯一とされる男になってしまったのだ、我も珍妙な甲冑に意識を移さねばままならぬ身になっているのを許容してやっているのだ、せいぜい我を飽きさせることのないようにな』

少年の名は織斑一夏、姉が世界最強で、知り合いに世界を常時ひっくり返す天災である美人な博士がいる以外は普通の少年だと自負していた。八つ上の姉のおかげで中学まで卒業出来た事に思うところがあり、高校は卒業後にすぐ就職ができるように就職率が高いところを選んでいたので。

「まさか、肝心の入試試験会場を間違えた上に物珍しさからISに触ったら起動してしまいましたくなんて冗談が実際に起こったからな——好奇心は猫を殺すってこういうことなんだという教訓にしてはオチがかつとんでね？」

『我も、事の経緯を聞いた時には貴様のあまりの阿保さに言葉も見つからなかったわ——まさか殺されるどころか不注意で地獄の修羅の道に入ってしまったと知った時の貴様の顔はひどいなんてものでは無かったな、後悔先に立たずというがあの時の貴様のことを表すのだろうか』

少年に待ち受けていたのは、学園島での孤独な生活。

「ISが女性にしか動かせないから、その専門学校はもちろん女子校になるのは分かるけど…もうちよつと何とかなんないんすかね」

『用務員とやらは男ではなかったか？』

「それはいいわけでは無いつつだけで孤立無援であることには変わらないんじゃないか？」

『知らん、だいたい女に囲まれているのだ少しは嬉しそうにしたらど

うなんだ？この時代の基準ではあるが貴様の顔や性格から特別嫌われるようなことはあるまい』

「正直に言うと、期待していなかったとは言わない。でも実際に女子校に通うっていいもんで決してなかった」

『そうか？例えばどこら辺が気に食わなかったのだ？』

「授業中は発言のたびに視線の的だし、昼休みにゆっくり出来ると思ったら視線の的だし、放課後にアリーナでISの訓練しても視線の的だし、自室にいる以外ではあまり気が休まるどころじゃない。それが好意的なだけだったら良かったんだけど、このご時世だろ？男の俺がIS学園にいることが気に食わない人もいるのは分かっていたけどあからさまににらんでくるし…注目されるのが好きなやつはこの状況でも楽しめるっていうなら是非変わってやるぜ、いや変わってくれ、変わってください！」

『器の小さい奴だ、気にしないようにすれば良いものを…修行が足りないのではないか？このような有様では、とても我を宿しているとはいえんな』

「うっせえ」

#### ISでの戦闘訓練

「鍛えるの自体は嫌いじゃない——だからといってお前のしごきに耐えられるとは言っていない」

『ふん、我を宿しているのだ自分で望んだわけではないにしろ女に負け続けるようではこの須佐能乎命の名が廃る。よって貴様を鍛えるのは間違いではなく、ただでさえ劣っているのを超えようとするならこの程度当たり前だ』

「死ぬかと思っただけが一日一回死ぬような思いをしてんだぞ、もう少し加減してくれないと持たないぜ」

『あきらめろ、どの道貴様には力が入用だろう、最も死にたいのであれば別だがな』

「ちくしょう、俺の学園生活は死となり合わせとか嫌すぎる、どうしてこうなった」

『貴様の運命と不注意を呪うんだな』

そして、迫りくる魔の手

「深夜の誰もいない校舎で妖怪退治つてもうジャンル違いだと思っただけど、そこらへんどう思ってる?」

『じゃんるだかなんだか知らんが、貴様がやると決めたことだろう』  
「ISってパワードスーツがある科学の時代にやるのが妖怪退治つて、専門の人とかいないの?」

『いるではないか、貴様の幼馴染をはじめとした女たちが、貴様一人でやるわけでは無いだろう。まして、貴様より強いと来ている。女たちだけに任せるといふ選択肢もないわけではない』

「女子にやらせて俺がやらないわけにはいかないだろう。ましてや、同い年のしかも知り合いが戦ってるのにさ」

『一端の誇りは持つているようだな、そうでなくてはせっかく我が契約してやっているとこのに全く意味が無い。戦いを好み戦いを引き寄せあるいは赴くのが我の性である、ゆえに』

「戦いからは逃がれられない、だろ。分かっているしその上で契約したんだだろうが」

『忘れなければ良い』

自身を宿した少年に神は問う

『貴様は何故力を欲する? 富か? 名声か? はたまた勝利か?』

少年は答える

「それは決まってる。守るためだ」

「俺の周りの人たちを、俺の世界を、大事なものを守るためだ」

誓いはここにあり、契約はなされた。

これより始まるは伝承に立ち向かう少年とその周りの人々のお話。  
「俺の世界はここだけだ、だからそれを脅かす奴がいるのなら」

少年たちの前に立ちはだかるは、あまたの伝承の妖怪、怪物、悪魔、果てには神さえも。

「この一太刀で叩き切る!」

少年は、荒神の力をもって神をも葬る。

「行くぞスサノオ、力を貸せ!」

『いいだろう宿主、存分に振るうがいい!』

『御神招来!!』』

『我、司るは天津の荒神!』』

『我、行使たるは唯守るために!』』

『我らの怨敵を叩き切る!!』』

『武神展開! 白式・須佐能乎命!!』』

ここに、物語が始まる。

伝承・無限軌道く武神に至る少年く

少年の武は神に届く太刀となる。

制作予定?

「ここまで原作ラブコメのはずで、しっかりヒロイン出すつもりなのに、女子が一回もしやべってないんだけど」

『我が知るか、別にこれが一発ネタでやる予告ネタだから問題ないであらう』

「よくはないだろ、本編では女子も結構出てくるっていうか、舞台ほとんど女子校だぞ」

『問題ない、本編を書くまでに一発ネタでヒロイン版をやればよいのだ』

「なるほどその手があったか、これなら男二人で話すだけの予告で終わらなくて済むか」

『作者が、投下するかは知らんがな』

「えっ」

『もしかしたら、他の作品を書き始めたり、今書いてる途中のオリジナルを投下するかもしれん』

「心配だなあ」

了

## 一 発ネタ：伝承・無限軌道く少女たちの変遷く

——時は、20XX年の春のことだった。

この物語は、ある少年がパワードスーツに触れたところから始まるがそれは少年の話であって、彼の周りの人々の始まりはその前だった、後だったりする。

ある少女は、自身の宿命と使命を胸に春を迎えた。

「私は、IS学園に望んできた訳じゃない。そもそも、私自身はISによる競技に出るつもりも無い。ここにきたのは、自分に課せられた使命に基づいただけだ——分かりやすく言うと、仕事で来た」

「えっ、箒、もしかして就職したの?」

「就職というには、私は未熟であるが…まあそのようなもの…一夏、どうして膝について頂垂れているのだ?」

ある少女は、自身の運命にまだ気づかないでいた。

「あなたが世界で唯一の男性操縦者、織斑一夏で間違いありませんか?、わたくしの名は…つて聞いてますの!?!」

「箒でさえ、すでに就職を終えて仕事に励んでいるとは

…!、これが女尊男卑社会の弊害だというのか…!」

「さて、私でさえとはどういう意味だ一夏。まさか私が就職も儘ならない程不器用だとお前は思っていたのか!?!」

「いや、就職の話ではなく、まずわたくしの話を…」

「だって、箒さん俺と最初にあつた時、グーパンで自己紹介してたじゃん。その後もクラスメイトに馴染めないで4年で転校した時、見送りに来たの俺だけのボツチだったじゃん。思い返してみると、相当なコミュ障だったと思うんだけど」

「いっいやっ、ちっ違うぞ、もう昔の私では無い、知らない人に話しかけるのだってもう大丈夫になったからな!私はコミュ障ではない!」

「わたくしの名前は、セシリア・オルコット。誇り高き英国の代表候補生ですわ!」

「友達はできたのか?」

「そっそれは、その…」



「き、い、て、く、だ、さ、い、ま、し!!」

ある少女は、自身の運命に向かい合っていた。

「まさか、入学式で遅刻してしまうとは…」

『だから言っただろう、あらかじめ早い飛行機で行けば良かったじゃないか』

「でも、空港も見張られてたのよ。直前の便に男とか潜りこめなきや私達捕まって今ごろ、予言を聞いたオカルト信者やマフィア紛いの連中にごきつかわれてたわよ」

『それだって、君が力を使えば何も問題なく脱出できただろうに』

「冗談!、試してるつもり? あいにくそう軽々しく使うようなもんじゃないって分かってるわ。誰かさんに教えてもらった通りね」

『それはそうとなによりだ、でもどうしようもない時は、躊躇う必要はないんだ。その時は自分を優先してくれ、鈴』

「ハイハイ、でいるんでしょここに?」

『ああ、それは間違いないと思う、けど人数が合わないな…』

「ふーん? ま、あとから一夏目当てに来るのがそうじゃないの? あいつ、よりによって世界初にして唯一の男性操縦者様だもの急ぎよ I S 学園に入ってくる奴もいないと限らないわ」

『いやそうだとしても数が合わないね、なんせ反応は僕らを含めてすでに5つあるからね』

「はあ!? だって四象だから4人のはずでしょ!? ほら、やつらから奪ってきた預言書にも書いてあるじゃない」

『いや、鈴これはもしかすると四象以外の人もいるのかもしれない』  
「へっ?」

『行っただろう? この I S は僕ら幽体を宿すことが出来るようになってるって。つまりその操縦者の中には僕たちのような奴を宿しているのもいるんだろうさ』

「それを早く言いなさいよ! つまり私たちがみたいのが他にもいるんでしょ? 味方なの?」

『それは分からないな、反応があっても何かは僕にも分からないんだ。たぶんまだ眠っているか、それともうまく隠しているかだと思っただ

けど』

「うう、それじゃあどうやって見分けるのよ、早く見つけないといけないんでしょ…」

『危険だけど一人づつ接触していくしかないね。幸いここまで隠しているという事は、あちらも手荒な真似はしないんじゃないかなすぐには』

「ああもう、せっかく中国脱出してきたのに前途多難じゃない!？」

『仕方ないさ、何とかやっていこう鈴』

ある少女は、自身を取り囲む状況に流されていた。

「…失礼しました」

(私、いやもう僕か。僕は本当にもうどうしようもない奴だ)

(お母さんが死んでから、お父さんに会って。自分が妾の子だって知って)

(それからなんの反抗もせずにはずるとここまで来てしまった)

(しまいには、IS学園への男装での入学…うちの会社が第三世代の開発が進んでないからって急すぎる)

(自暴自棄になってる僕にだってわかるさ、男装だつてばれてしまえばおしまいなのに寮での共同生活なんて危なすぎる)

(でも、もうやるしか…いやそんな高尚なものでもないか)

(ただただ僕はあの人たちの命令を聞くだけなんだから)

『———いいのか———それで———』

「ツツ!?気のせいか」

(まただ、一人で考え込んでいると何か聞こえてくる)

(もう末期なのかも)

(もうこれでおしまいなのかな、でも…出来ることなら)

「自由になりたい、なんて無理だよね…」

ある少女は、自身の救いとなった背中を追い続けていた。

「では国の代表として頑張ってくれたまえ、ラウラ・ボーデヴィツヒ中尉下がってもよい」

「了解しました、では失礼いたしました大佐殿」

「まさか、教官が教鞭をとっておられるIS学園に行くことになる」と

はな

『ふむ、ラウラも良く承諾したものだ。最初にきた話は蹴ったではないか』

「仕方あるまい、これは上官からの命令だ。そうでなければ、自身の部隊を置き去りにして学び舎に行くなど教官に合わせる顔がないではないか」

『まあ、あの子はそんなことは気にしないと思うがね。儂が見たところ、見た目に反して甘いところもあると見た』

「それこそありえないだろう。あの織斑教官殿に甘いところなどない。私が尊敬している教官の甘いところなど見たところもないぞ」

『ほう、ではラウラ君が彼女に訓練の成果をほめた時のあれは甘さでは無いのかね』

「?良い成果を出した部下をほめるのは当然ではないのか?おかしなことを聞くものだなシルトクレーテ」

『ふむ、いい加減儂の名前をよんで欲しいものなんだがね?君が分かりやすいのはいいんだが、聞き覚えのない発音が自分を示している、というのもどうにも具合がねえ』

「良いではないか、そもそも元々の名前をお前が私に伝わる字で表せば良かったものを、ゲンブだなんていわれてもなじみがないのはこちらも同じなのだぞ」

『その割には、何とか儂のドイツ語を調べてきたじゃないかなのに亀とはひどくないかね』

「私が気に入ってるのだ。いちいち文句を言わないでほしい」

『……ふむ、ラウラが気に入っているのなら良しとするかの』

ある少女は、自身のまえにいつも立ちはだかる壁を目の前にしていた。

「はあ、どうしよう」

『かんざし、元気出して』

「うん、ありがとうサトリ。けど……まさか……」

『かんざしのあいえすが開発中止になっちゃったね』

「うん、倉持技研は濁してたけどタイミング的には例の男性操縦者の

データ取りのために専用機を用意するために私の専用機開発を中断したんだろうけど…」

『やっぱ、元気ないねかんざし』

「うん…やっぱり完全に納得はできないし…とりあえず開発中の打鉄・式式は受け取って学園のガレージに置いてきたけど…」

『どうする？お姉ちゃんに相談してみる？』

「それはっ！…でもどうしようもないし、でも…それでも…」

『うーん、じゃあかんざしが完成させるのはどう？』

「私が…ISを…打鉄・式式を完成させる？」

『お姉ちゃんでも出来たんだから、かんざしだってできるかも』

「…そうだね、あの人を頼るのはもう嫌、私だって出来る。やってみせるー！」

『その意気だよ、かんざし』

ある少女は、受け継がれてきた物の責任と自分らしさで揺れ動いた。

「うーん、よし！今日のお仕事終了ー。毎日、生徒会の仕事に、実家の仕事にあたしはてんでこまいよ」

『それが、お前の使命だ十七代目。それは、楯無を継承する際に拙僧から何度も伝えたではないか』

『およしなさいよ、これでもしつかり仕事してるほうじゃないか。乙女にあんまりいうもんじゃないよ』

「はいはい、ありがとね。全く簪ちゃんのこともあるっていうのに、今年の新入生は本当に問題が多そうね」

『ただでさえ、篠ノ之の奴の妹が来るばかりでは無く、代表候補性が何人も、挙句のはてには男性操縦者とくる仕方あるまいて』

『さらには、四象に篠ノ之の件、さすがに手に負えないかね』

「やるしかないでしょ、私は十七代目更識楯無よ。やってやれないことなんてないわ」

『その意気やよし、見事役目を果たして見せよ十七代目よ』

『ま、せいぜいかんばるんだね、お嬢さん』

彼女たちは少年に出会い、そこから変わっていく。

この物語は、少年の周りに集う少女たちの物語でもある。  
伝承・無限軌道く少女たちの変遷く

彼女たちの思いが世界を救う糧となる。

制作予定

「わたくし、影が薄くありませんでした？」

「それを言ったら僕だけ完全独白みたいだったし」

「大丈夫だ、本編ではちゃんと地の文も書くよと作者も言っている」

「そーよ、気にしてたらきりがないわ：ってどうしたのラウラ？」

「いや、教官の話がないのだが、おかしいではないか？」

「織斑先生なら、一夏君のヒロインじゃないからこの枠じゃないらしいわよ、それは篠ノ之博士も一緒だけどね」

「あの人たちの会話流すと、本編のことを話しすぎてしまいうらしいので」

「「「「では、次は願わくば本編で会いましょう「「「」」」」」

了